

蓮華王院本堂(間三十三堂)の諸佛

湛慶作に關して

丸尾彰三郎

一

京都蓮華王院本堂の諸佛、即ち中尊千手千眼觀音、その左右の壇上に安置してある千體の千手觀音、今堂の後側に列べてある觀音廿八部衆等の諸像は相俱に稀觀の遺構として人の注意を惹いて居るところである。さうしてその諸佛の内中尊と廿八部衆等の像に就いては既に一應の調査が遂げられ、それぞれの價值に就いての考慮も相當に費されて居るのであつたが、その千體佛に就いては中尊や廿八部衆等と同様の價值あるべきものかとの想像が行はれながら、主としてその數の多いこと、又現在安置の状態では調査に不便であること、で未だ調査が遂げられなかつた。

ところが昭和五年二月から本堂の建築の大修理が行はれることになつて、それに従つてかの千體の觀音像を壇上から移座することになつたので、こゝにその調査の機會が到來した。即ちかの南から北へ長く延びて居る堂を大體南、中央、北の三區に分ち、その南方を第一期として工事に着手したので、その區劃内の壇上の千體佛はこれ等を未着手の他の區劃内に移し、その第一期工事の竣成と共にそ

れ等をもとの位置に戻したのであつたが、その再安置の際に調査を行つたのである。又第二期中央區工事に移る爲めにその區劃内に在る千體佛をまた他に移したが、これは未だ調査せられない。たゞこの際中尊は一應の調査をした。さうしてこれ等の調査に於いて注意すべきことが多く發見せられた。

これ等の調査は千體千手觀音に關しては未だ第二期、第三期の區劃内のものを殘して居り、又中尊に關してはその像の巨大である爲めに大仕事である移座の混雜の中に行はれたもので、最近行はれる本像の修理の際に詳しい調査を遂げることになるから現在ではすべて未完了の域にあるのである。たゞその限りに於いても勞力相當の面白い結果を收めて居るから、今こゝにその大概なり一部なりを記し留めることとする。

二

この調査の結果に就いて豫想期待されて居たことはなか／＼多いが、さしあたり、今こゝに問題とする點に就いて言へば、第一に中

尊像に於いてその製作年代や作者に就いていろいろな傳來があるが、像自身に於いてそれ等がどういふ風に明らかにされるか。落慶作であると言ふがなにかその證據が見付からないか。銘文とか納入物とかで發見せられないであらうか。補修のことなどに就いても何か知られる處がないか。次に千體觀音像に於いてもその製作由來についての所傳が實物とどう關係して居るか。即ちその内に本堂本願の時のものが傳はつて居るであらうか、その後の製作がどれだけのものとして存して居るのか。もしそれ等に本願の時、再興の時兩方のものがあるならば、その製作せられた年代からすると藤原末葉から鎌倉初期へかけてであるから、これ等千體像はその間の様式推移の様を展示するものとして大きな興味が繋がる譯であるが、結果はどうであらうか。その内に働く著名な作家を發見し得ないであらうか。ところがこれ等の豫期はこの度の調査なり發見なりに於いては満足されたのであつた。併しそのことを語る前に、我々は文獻等によつて傳へられて居る處の大體を一應見て行かうと思ふ。それは實物を見るのにつけてある準據となり、補足となるから。

さて蓮華王院本堂の造立は後白河法皇の御本願であつて、百練抄、一代要記その他によつて知られるやうに、長寛二年十二月十七日に御幸があつて御供養が營まれた。これは落慶供養と思はれるので、現存の堂はこの時のものではないがほゞその舊形を留めて居るものとしてよいらしい。尤もかの堂と像との宏大な結構からしてはこの供養の時に堂と像との全部が落慶したと決める譯には行かないかも知れない。しかしその後間もなく蓮華王院五重塔が建立せられるこ

となり、安元三年十二月十七日にはその落慶供養が行はれて居る（玉葉に詳し）から、少くともそれより早く本堂は完成して居たと見るべき譯もある。

この蓮華王院は其の後は建久三年後白河法皇崩御までは勿論、それ以後も時代に重きをなしたものであつたと考へられるのであるが、建長元年三月廿三日洛中姉小路室町に起つた火は大火となつてその餘焰が蓮華王院の塔に移り、又本堂も共に炎上して了つたのであつた。その佛像は一代要記には

「千體觀音像成灰燼、中尊者御首左手計取出之、又千體之中百五十六體并二十八部衆取出之」

と記され、増鏡には

「千體の千手一時にはほにたぐひ給へば」

とあり、五代帝王物語には

「中尊は出しまいらせて千體の御佛もわづかに二百餘體とかやぞ取出しまゐらせける」

と云ふ。

さて右の内第一に本堂であるが、これは直ちに再興のこととなり、建長三年八月十日上棟（岡屋關白記、百練抄）のことがあり、その後十五年を費やして文永三年四月廿七日にその落慶供養（一代要記、増鏡等）が行はれて居る。現在の建築は後世の修理、殊に慶安年間の大修理を経て居るが骨子はこの文永再興のものと考えられる。

次に中尊は建長の火に救ひ出したと言ひ又「御首左手計」取出したと傳へるが、記録としても實狀を想像しても一代要記の記す處が信すべきもの、如く、これまた再興のことが企てられて居る。即ち

一代要記、百練抄によれば、これを建長三年七月廿四日法勝寺に於いて同寺の阿彌陀堂の本尊像（寛元四年八月廿八日焼失のもの、再興）と共に御衣木加持を行つて造り始めて居る。

百練抄 建長三年七月廿四日、法勝寺阿彌陀堂并蓮華王院等御佛奉作始之於法勝寺、有此事

上皇臨幸寺門

一代要記 建長三年七月廿四日、法勝寺阿彌陀堂御佛御衣木加持圓満院、有御幸、蓮華王院千手御衣木於同場加持

次に千體観音はその一部が取出されたとなし、その數は一代要記の百五十六體といふ正確らしい記述に暫し信を措くべく、たゞその補充再興はこゝでは明らかでないが一代要記の千手御衣木といふのにはこの千體の千手観音のも入つて居るとも見られやう。又廿八部衆は取出されたことゝなつて居る。

次に本堂諸像の作者に就いては信すべき造立當時の文獻はないやうであるので、今大佛師系圖によつてそのこと及び後世の修補等のことを見るのに、先づ中尊像は、

一、運慶これを作り、建長年中湛慶再興、小佛師康圓及康勝與之。

一、慶長十年八月朔日より秀頼の命によつて法印康正これを修補す。

又「此時中尊内約僧正行慶作書付アリ又佛師康金法眼康永法眼トアリ案之湛慶作建長以後修復之事歟」とあり、行慶康金は本系圖等では不明であるが、康永は同系圖に文明十六年五月十八日卒とあり。これを信すれば文明中或はそれより少し前に修復ありしか。佛工系圖にはこの行慶を康慶の誤の如く取扱つて居るが遽かに従ひ難い。

一、慶安四年三月中旬家光の命により法眼康知康音これを修復す。

一、寛文四年法印康祐これを修復す。

即ち當初のものは運慶で、建長年中に湛慶主となりこれを再興と云ふ如きである。

次に千體千手に就いては、

一、康慶作もあれど多くは京中四流佛所寄合の作といふ。京中四流は又七條大宮佛所

（東、中、西）六條萬里小路佛所と記す。

一、法印康正の言として湛慶の作に非ず。七條、六條佛所寄合作、但運慶所作亦二三體相殘と録す。

一、慶長五年より九年まで秀頼の命により康正修復。

一、慶安四年三月中旬より家光の命により康知康音修復。

一、寛文四年康祐修復。

即ち康慶、運慶のものも數體あるが、多くは七條六條の佛師等の作で、湛慶の作はない、と考へられて居る。

又廿八部衆は、

一、運慶これを作る。

一、建長年中修復す。

一、慶長十年八月朔日より秀頼の命により康正修復。

一、寛文四年康祐修復。

即ち運慶作との所傳である。

大體右のやうな傳來にあるのであるが、これ等が本堂自身、像自身の今回の調査から得たところとどのやうに一致するか、又しないか。それが次の問題となる。

三

擬本堂の建築に就いてはこゝには語らないことゝして、直ちに像に説き及ぶのに、先づ中尊千手千眼観音である。

中尊に於いてその移座の際（昭和六年五月三日前後數日）我々は

左記の三つの銘記を発見した。

其一はこの像の内列になつて居る腹部下位に當つて胸部と膝部とを仕切るやうに平に板が張つてあつて、その板の上面に朱書（第一圖）がある。その板は多年の間に鼠の引き込んだ澤山の塵芥などとの接觸の爲めにか處々腐朽して居るのでその朱書は多く判明しないが、大體左の如く讀まれる。

第一圖 中尊像内仕切板銘記

この銘記は恐らく當初のものであらう。

其二は像の臺座の心棒（一木で圓柱形、長六尺九寸五分、徑四寸九分）の側面の墨書である。それは正面に向く個處と背面に向く個處とに各々縦に一行書に記して居るので、その正面のものは

蓮花王院奉造立千手觀音中尊建長三年^{辛亥}七月廿四日於法勝寺金堂御前、奉始之同六年^{甲寅}正月二十三日奉送之修理大佛師法印湛

第二圖 中尊台座心棒銘記（原寸）

奉造立中尊

建長三 七月廿四日

於法勝 始之

同六年^寅正月廿

大佛

小佛師

但 寺大也

慶生年八十二但康助四代御寺大佛師也

とあり、湛慶の名に列べて「小佛師法眼康圓」、「小佛師法眼康清」（第二圖參照）と記し、又その背面のものは、

蓮花王院中尊千手觀音并脇士御修理之事慶安四年^{辛卯}三月中旬從

公方様被仰付七條大佛師法眼康知奉修理之湛慶^{ヨリ}十八代也

とあり、湛慶云々の横に列べて「小佛師康春」「小佛師康壽」とあ

る。孰れの面共心棒が甚しく汚れて居て文字の不明な個所があつたが、その汚れを洗ひ落して行く内に次第に判明して來て全部判讀し得た。

この二つの墨記は熟視するのに書體に甚だ似た處があつて同筆と鑑せられる。たゞ背面のものが全く慶安年度のものと思はれるのに、正面のものは同筆と鑑せられながら書體に慶安のものとは異つた處が見え、それは古風——鎌倉時代までも溯り得る——となすべきかに考へられる。建築技術家によつてその心棒の材がその質、その古色工合や削り方等から鎌倉期のものよりは慶安頃のものとなすべき由も説かれて居るから、慶安年中に心棒を新たにし、慶安の修理銘を記すと共に、建長の古い心棒に記してあつた處をも摸寫して置いたものと、前述の兩書體の相似相異の點から推定せられる。たゞこの正面のもの、文面が前記の胴内張板銘記とは同じであるらしいのでかく重複して銘記することは不要な、或は不穩當なこと、考へられないでもないが、この頃の造像銘記にはほゞ同様に重複して記した例もあるし、とにかく正背兩面の書體が全く一致しないで正面のものに古風を認める限りでは上述のやうに解くのが良いのではなからうか。たゞこの心棒は本像臺座移座の匆忙の間に調査されたのであり、最近に本像修理の際の落付いた調査の機を控へて居るから大體以上のやうな考察の程度に保留して置く。

其三は本像の膝裏一面にそこに塗つた黒漆の上に胡粉で書いたもので、左記のやうに判讀せらる。

前天龍大歡進崗奇
普明院心原和尚

至本尊一千一体并廿八部
衆彩色畫所人數之事

淨具

妙慶

以下妙慶の横に列べて常家、定圓、慶玄、定康、雅樂、將監、數衛、大貳、彌三郎、大藏、與五郎、築後（マキゴ）、新五郎、六郎次郎、彦二郎、弥九郎、弥二郎の名を一つ一つ記し、次に

(弥二郎)

自永享六歲至同九年丁巳正月

修覆並彩色等

悉畢

さて以上三つの銘記に就いて考へるのに、

第一、其一のもの、不明の文字は其二のものによつて補ひはゞ判讀せられるであらう。それ等で見ると前記の文獻に傳へる建長三年七月廿四日法勝寺金堂前で本像を造り始めたといふこと、合致して居る。それにそれを蓮華王院に送つて來た日も知られた。(尤もこれ等の銘文に記す處は大佛師系圖にも記されて居た處であるが、それは恐らく慶安修理の時にこの銘文を讀んで傳へたこと、察せられる) 建長三年八月十日の上棟から文永三年の落慶供養に至るまでの本堂再興の大切な一つの途程を知り得るのである。

第二、修理大佛師法印湛慶云々の文に於いて我々はまた多くのことを學ぶであらうが、

(一) 湛慶とこれを助けて康圓、康清の作であること、但し修理大佛師と稱へて居る。

既述文獻に於ける建長の火に當初のものを救ひ出したか首と左

手とのみを取り出したかでの「修理」の解釋が異つて來やう。即ち湛慶は當初のもの、傷損を修理したのか、首と左手とはもとのものを用ひてその餘を大補足修理造立したか、或はまたそれ等の古物は用ひずに全く新造し、修理とはたゞ復興との意味に止まるのか。これに對する答はたゞ現存のもの、實査から得らるゝならば得られよう。

こゝにその大體を云へば建長には像の全部を造つたのらしい。頭部も胴體等も建長年間のものと思ふべく考へられる。併しこれは平常より更に闇い本堂修理工事場で見たことであるから、愈ゝのことは最近の本像修理の調査後に譲りたい。左手のことに就いても亦同様である。

(二) 右の結果は孰れであるとしても、建長の再興の時の大佛師は湛慶であつたこと。この時彼は法印にして年八十二の老齡であつた。それは既に大佛師系圖が語つて居たことであつたが、前にも記したやうに恐らく右系圖の記述もこの銘文から來て居るのであらう。これ等のことは他の文獻上實物上總ての側からの事實と矛盾して居ない處である。例へば東大寺續要錄造佛篇に

「建長八年三月廿五日大講堂御佛重加彫刻 中尊千手觀音

立像長二丈五尺 大佛師法印湛慶 湛慶不遂造功而令死去之間

以康圓法眼爲大佛師終造功畢」

とあるのなども話が合ふ。こゝに湛慶の歿年の大體の見當も付くこととなる。而もこの建長六年に湛慶が八十二歳であつたと言ふことは鎌倉彫刻史の研究の上に役立つ處が大きい。即ち今康慶、運慶、快慶孰れもその大體の生存年代は判つて居るが

その年齡は誰のも知られて居ない。この湛慶の年齡の明らかに知られたことはこれを準據としてそれ等の人々の年齡を推定するのに好都合であることとなる。(國華第三九八、三九九、四〇一、四

一一號、拙稿「西方院の阿彌陀像に就いて」參照)

(三) 康助から四代、即ち康助、康慶、運慶と湛慶は蓮華王院の大佛師であつたこと。

こゝで考へられることはこの四人が建長の年までに蓮華王院の造像に關與したとなると、湛慶は建長の時の大佛師、運慶は廿八部衆の作者として働いたといふことであらうか。康慶は治承元年十二月十二日に落慶した蓮華王院五重塔の本尊の作者として「玉葉」が傳へて居る。さうすれば康助は長寛二年落慶の最初蓮華王院本堂の佛像の大佛師で、その本尊、殊に中尊の千手觀音は彼の手によつて作られたものであつたことが、文獻(大佛師系圖等をも含む)上にも知られないこととてこゝに知り得た大切なことである。現在の中尊がその一部分でも湛慶以前のものなら、そこは康助の作であらうし、千體觀音像の内に本願造立のものが遺存して居るならば、その内には彼の作があるかも知れないこととなる。

(四) 心棒の背面の慶安年中の銘もまた彫刻史研究資料として注意すべきものである。

なほ慶長十年中尊像修理の際に發見したといふ僧行慶、佛師康金、法眼康永等の書付は頭部、胸腹部内に入つて一應は調べたが見當らなかつた。

中尊像の銘文に就いての考察は大體以上に止めて、次に千體千手

観音像の調査のことに移る。

四

千體千手観音像の調査は大體昭和六年四、五の二ヶ月に亙つて本堂南寄の凡四百體に就いて新納忠之介氏及び其助手二名によつて行はれた。それ等を一體一體その形狀、法量、製作時代、補修、銘文等に關して行はれた。たゞその調査は佛體を既に落慶して居る堂南部一廊の壇上に安置しながら、安置する間に行ふので取急ぐべきことなどの事情もあつて、極く詳細には行ひ得なかつたが、それでも大體各像の寫眞を撮り、銘文のあるものはその銘文の寫眞、拓本若くは籠字寫し等がとられた。その詳細なことは未だ新納氏の調査の整理が完成しないから分明しないが、自分の觀察した所によると、それ等の内には恐らく長寛本願の頃の作と思はれるものもあり、最も多いのは矢張り建長再興の時のもので、それ以後の補作補修また相當に數へられるらしい。銘文が殆んど何れにもと言つていゝ位存して居る。それにはその像造立關係のものもあり、修補についてのものもあり、臺座等の製作關係のものもある。作者名が最も多く、稀に年記もあり、慶安修理記とも言ふべき長文のものも見受けた。作者は數十名に上るべく、その内に大きな收穫が幾つか存して居る。それ等の内の主要なものを自分の實査した限りで以下書き列ねる。

先づ千體千手観音像各軀通じての形狀の大體を記せば、

檜材、寄木造、内刳、漆箔、十一面、四十二臂像で寶髮は丈低く小形に束ねてその餘

を總のやうに垂らす藤原末期通行の髻に結び、垂髮兩肩に懸る。毛筋は天冠臺から上はこれを彫り現はさないが、天冠臺から下（即ち生際の方）はこれを刻むものと前方で櫛の束目のみを彫り現はすものとあり、紺青に彩色す、天冠臺彫出、漆箔、左右耳上邊に銅製透彫、吹玉付冠飾を付く、又そこより木製漆箔冠紐を垂る、白毫水晶、眼は大多數彫出、甚だ稀に玉眼あり、胸邊に銅製透彫飾を着く、左肩より條帛を懸く、腰に紺衣を着く、折返しは二段、天衣兩肩より懸りて膝前を並行して互り合掌の臂に懸りて垂下す、光背は二重輪の頭光で光明線を着く、臺座は木造、漆箔で三遍葺吹寄蓮花、胡桃形反花、八角形二段框座、八方足付、像高 五尺五寸前後

湛慶の作四體

千體佛中發見した作者銘中顯著なのは湛慶である。それは今回調査中に四體發見された。それ等を左記すれば



第十號像銘



第二十號像銘
(原寸)



第三十號像銘

第三圖

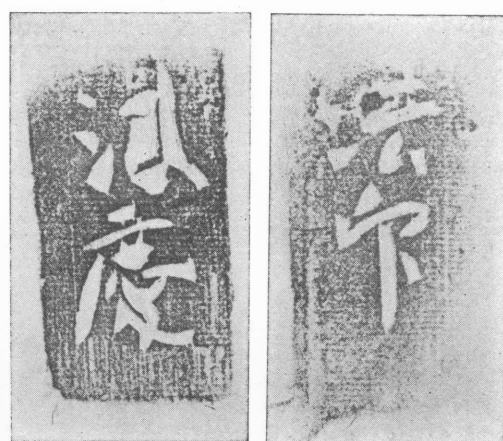
其一、左足柄の正面に「法印湛慶」の彫付銘あり、持物鉢に「尊弁」の刻銘あり。臺座に墨書花押及び「定弁」とあり。（圖版第五）（新調査による佛體番號第十號）

其二、左足柄の正面に「法印湛慶」の彫付銘あり。光背に「定弁」の刻銘あり。（同上番號第二十號）

其三、左足柄の正面に「法印湛慶」の彫付銘あり、持物鉢に「尊弁」錫杖に「弁四」、光背に「定弁」の何れも刻銘あり。臺座に

墨書花押及「定弁」とあり。

（同上番號第三十號）



第四十號像銘

（原圖）

其四、左足柄の正面に「法印」、右足柄の正面に「湛慶」の何れも彫付銘あり。臺座に「定祐」の墨書銘あり。像身金箔後補にして美觀を損じ

て居る。（同上番號第四十號）
右三體共同し形式で前記の千體佛形狀の如くであるが、頭髮は天冠臺下（即ち生際）で毛筋彫をなし、玉眼でない。

又孰れも鎌倉期の健達な手法を示し、而も建長以後造立のものと
思はれる千體佛中最も優技あり、さこそ湛慶の作と首肯せられる。

（建長より古い像は今こゝには敢て比較しないで暫し別に考へる）

中尊像を全く湛慶の作とすることに就いて決斷を保留して來た我

々はこの四體の像に於いて、第一に、かの像を彼の作となすべきや否やのさし當りの標準を得たのであり、第二に、たゞそればかりでなく、今まで彼の作としては「法印大和尚湛慶□□也」と言ふやうなはずきり造像銘と決し難い墨記のある高知縣吾川郡長濱村雪蹊寺の毘沙門天、吉祥天及び善膩師童子の三尊像が考慮されて居り、文獻上からは更に信憑すべき遺作がなかつたので、この信據すべき湛慶銘のある千手觀音像四軀はなほ將來の發見は別としてさし當り彼の作の標準である。

さてこゝでこれ等の像の製作を細かに吟味して彼の作振りを觀たり考へたりするといふのであるが、それは暫し他の機に譲るとして、こゝにたゞ一つのことを言へば、湛慶のこれ等の作は孰れも鎌倉期彫刻の様式や手法をよく現はして居る。と言ふ志は、彼の司り又腕を揮つた建長年間に於けるこれ等の千體千手像造立は長寛年中に出來たもの、數が缺けたのを補ふ爲めであつて、然る上は、若しその時彼の前にその古千手像が遺存して居るならば——後に説くが實際遺存して居たと考へられるが——彼の作るのはそれによつて作るので、それに似せるべきものゝやうにも考へられるが、彼はさうはしない——たとへ法量や格好位はさうしたが——鎌倉期の、彼の手法をそこに現はして居る。鎌倉時代様式の完成者である運慶の子として正しく然かあるべきであると言へる。さうしてこれ彼の態度であるとしたならば、それは彼の手に成つた中尊の製作を既記のやうな點に於いて考察するのによく思ひ置くべき事柄であらう。

なほ一つ説けば、これ等の像は建長年中の作であらう。建長と言へばその邊で鎌倉時代は前後に分けられて、漸く緩んだ時代末の傾

向の見え始める頃である。その様子がこれ等の像に見えないのではないが、なほよほどしつかりとしたその初期の風が存して居る。これはこの作者はこの時は八十餘歳といふ高齢で作を成したので、湛慶なるものはそれより遙か早く成つて居た事情によるのである。このことはこの時湛慶を補佐し、湛慶がこの千體佛再興の業の途中で

一丘筆人物像に就て

今回美術研究所に購入せられたる一丘筆の人物像なるものは其形式上から耶蘇十二歳の像であると推定すべきものであるが（新約聖書路加傳第二章四十一節以下參照）異教に對する彈壓の最嚴重なりし徳川中期の作品として頗る驚異の眼を瞠らしむるに足るものである。

圖は絹本、豎七九糎、横二八糎。畫面には西洋水彩繪具を使用したやうで、殊に顔面の一部には油彩を用ゐた形跡がある。

所で此圖に對して疑問の念を深うするものは、之と全然同一構圖のものが幾多存することである。ざつと余の記憶から摘記しても静岡縣横須賀町撰要寺所藏の真人圖と題するもの、同地松本醫師所藏の蘭婦人眞像と題するもの、長野縣東筑摩郡片丘村安藤爲之助氏所藏のもの、愛媛縣波止濱町西本隆之氏所藏のもの、又南蠻畫集に收

世を去つた後は彼に代つてその業を司つた康圓が湛慶のこの作風を建長より遅れてもなほ繼承して行くかに見える點と共に鎌倉彫刻史上に注目すべき事柄と考へる。このこともまた詳しくは康圓作の千體佛を説く時に譲ることゝして、湛慶作の千手像に就いては上記に止める。

黒田源次

めらるる大鳥富士太郎氏所藏のもの等がある。而して此外にも尙二三追記することは困難ではない。之等は黒田氏のものに光背及び白毫を附してある外、殆んど寸分違はぬと言ふことができる。大さも略同じであるが二種あつて、一は今回發見のものと同じ型で掛幅であり、他は松本氏の蘭婦人像の如く箱入のもので豎四二・五糎横二九糎位のものである。撰要寺のものは前者に屬し、西本氏のものとは後者に屬する。

次に筆者の問題であるが一丘は本より大久保一丘である。一丘は古畫備考によると天保十三壬寅廣益諸家人名錄第二編に

「一丘、名好古、字敏夫、横須賀藩、木挽町三丁目 大久保總次郎、畫」

と出で、ゐるやうであるが、大久保惣次郎が本名で、好古又は古と